発達のなかの煌（きら）めき

第Ⅰ部　障害のある子ども・なかまの発達

白石正久　白石恵理子

しらいし　まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第11回　自分を客観的にみつめ出す「九歳の節」

前号では、五歳後半～六歳頃に「生後第三の新しい発達の力」が誕生し、それが原動力となって、次の大きな質的転換期である「九歳の節」につながっていくことを述べました。

自分の左右がわかってきた子に対し、互いの両手を突きあわせるようにして、向かいあう相手（検査者）の左右を尋ねます。「先生の右手はどっち？」に対し、最初は、自分の右手と同方向（左手）を答えるでしょう。それが、「生後第三の新しい発達の力」が生まれる五歳半ばになると、自分の右手とは反対側が相手の右手であることを直感的に理解し始めます。しかし、「どうしてそう思ったの？」と聞かれると答えは動揺しがちです。それが、「七歳の節」（三次元可逆操作期）になると、「向きが反対やし」等と理由もきちんと説明して揺るがない答えをするようになります。このように、みかけ（現象）のちがいに迷わされずに、その奥にある共通性を取り出せるようになることが、上位概念の獲得に代表されるような「九歳の節」につながっていきます。バス、船、バイク等を個別具体的に理解していた段階から、「人を乗せて運ぶもの」として「のりもの」という本質

連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」第九回は、こちらから見ることができます。

を抽出できるようになるのです。これが、抽象的・論理的な理解の基盤になります。この連載では、こうした力を外からの教え込みによってではなく、子ども自身が主体的に外界に働きかけていくこと、多様な人とのかかわりのなかでつかみとっていくこと、それが互いを大切にしあう人格発達につながることを述べてきました。この「九歳の節」では、自分自身をも客観的にみつめる力を獲得し、その力は自分で自分を育てる力、すなわち自己教育力にもつながっていきます。

ケイタさんのこと

ケイタさんは小学三年生になって他校から転校してきました。ＡＤＨＤの特徴があり、授業中の立ち歩き、教師の発問に反射的に答えてしまうといった行動が四月当初から目立っていました。給食で並んでいる子の列に割り込み、並んでいた子が「並んでいるのに…」とつぶやいたとたんに「うっさい」と怒鳴ります。休み時間には、ボールをもって運動場に出ようとしている友だちの後ろから走ってきて、友だちが持っているボールをとりあげて先に遊び始めます。「ぼくらがボール取りにいったのにな…」と子どもたちのなかにモヤモヤが残ります。ケイタさんの自分勝手な行動に不満を抱きつつも、カッとなりがちな彼に正面から文句を言うことができずにいました。一方で行動的なケイタさんは、転校後一週間ほどで新しい学校の校区を周り、地名や特徴を把握し、学校の先生の名前もすぐに覚えます。

担任は、暴言・暴力は「絶対にあかん」と伝えつつ、トラブルのたびに学級で話しあいをもつことを繰り返します。そのなかで、なぜケイタさんはそうした行動に出てしまったのか、そうしたくてしているわけではないこと、後から気づいて反省していること、集団で注意されると素直に謝れなくなることなど、ケイタさんの思いを代弁することにもつとめていきます。

リレーのとりくみで

六月、リレーのとりくみで、担任は足の速いケイタさんをチームリーダーの一人に推薦します。はりきってリーダーになったケイタさんですが、チームのメンバーが転んだり、バトンを渡し損なったりしたとたんに「あほ、ぼけ、なにやっとんじゃ」と罵声をとばしてしまいます。転んだ子が泣き出してしまったり、「もう、やりたくない」と言う子も出てきました。そんなある日の「帰りの会」で、別のチームの子が「今日、転んじゃったけど、リーダーの○○くんが〝ドンマイ〟言うてくれて嬉しかった」という発言をします。いつもは、机につっぷして鉛筆などをもてあそび、聞いているのかいないのかわからないようなケイタさんが、この発言の途中から、相手にしっかりと身体を向けて、食い入るように聞いていたそうです。先生は「あ、いつもとちがう」と感じます。

翌日のリレーでは、彼は「ドンマイ」「ゴー」と別のチームリーダーを真似るような声かけをするようになったとのことです。ケイタさんが意識しているねがいは「リレーに勝ちたい」なのですが、「勝ちたい」だけでは、友だちと自分への能力主義的な見方を強めるだけになってしまいかねません。リレーのリーダーになることによって、彼の「勝ちたい」ねがいは、「あんなリーダーになりたい」という憧れをもったねがいにつくりかえられました。彼の「勝ちたい」という表面的なねがいの奥に、友だちのなかで認められたい、友だちに必要とされる自分